



2023年2月10日

シニア自然大学校 研究活動報告会

「船は天下の要用」 水運の種々相と歴史

森と海の自然科
福嶋 昭治

五色塚古墳と

明石海峡

4世紀末～5世紀初め



五色塚古墳

2022年5月5日

前方部先端にて



大阪湾口の古墳

神戸市垂水区
泉南郡岬町

五色塚古墳（4C末～5C初）

宇土墓古墳（5C中～後）

西陵古墳（5C前）



日本書紀 卷第五

崇神天皇

3世紀後半？

十七年秋七月丙午朔詔曰船者天下之要用也今海邊之民由無船以甚苦步運其令諸國俾造船船冬十月始造船船

ムネツモノ
船は天下の要用なり

「はつへんどしらすめらみこと」

始馭天下之天皇

始馭天下之天皇（神武）

御肇國天皇

御肇國天皇（崇神）

古墳時代の舟

（舟形埴輪）



藤井寺市・岡古墳 4 C 後



大阪市・高廻り2号墳 5 C 前



滋賀県栗東市・新開
4号墳 5 C 中



宮崎県西都市
西都原170号墳

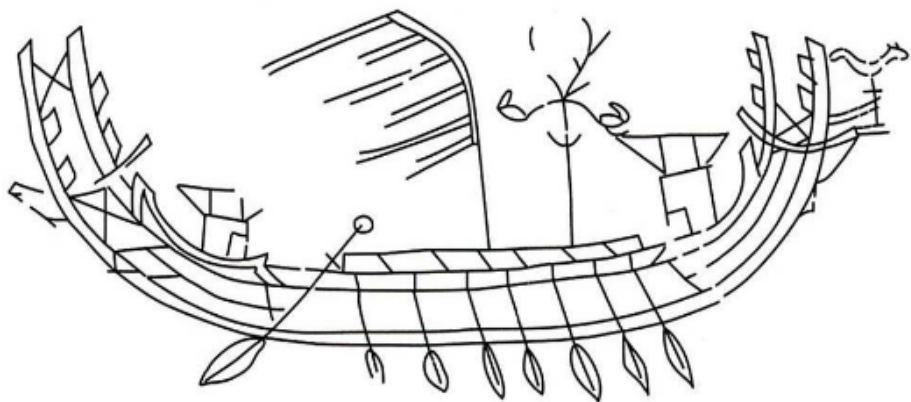
5 C 前

古墳時代の舟

(埴輪線刻)

船絵線刻
鰭付円筒
埴輪

(天理市・
東殿塚古
墳)
4C初



高槻市 今城塚古墳 6世紀半ば

継体天皇

531年没



2023年1月12日



阿蘇溶結凝灰岩（ピ
ンク石）製 石棺材



大王のひつぎを運ぶ実験 航海 二〇一八年

7月24日宇土市〜8月26日大阪南港



復元古代船「海王」

台船「有明」(蓋用) 長8m幅2.2m
重さ3.5ト←



台船「火の国」(身用)
長10m幅2.4m重さ4.5ト

日本書紀

卷第二十二

推古天皇十六年（608）

隋使裴世清の飛鳥入京

7世紀初

每國置屯倉

十六年夏四月小野大唐使人裴世清國號

妹子臣曰蘇因高即大唐使人裴世清下客十

二人從妹六月壬寅朔丙辰客等泊于難波津

是日以飾船三十艘迎客等于江口安置新館

麗館之上六月壬寅朔丙辰客等泊于難波津

是日以飭船三十艘迎客等于江口安置新館

於是以中臣宮地連磨呂大河內直糠手船史

王平爲掌客爰妹子臣奏之曰臣參還之時唐

帝以書授臣然經過百濟國之日百濟人探以

掠取是以不得上於是羣臣議之曰夫使人雖

死之不失有是使矣何怠之失大國之書哉則

坐流八月辛丑朔癸卯唐客入京是日遣飾騎

七十五疋而迎唐客於海石榴市衢赦之不坐

也秋八月辛丑朔癸卯唐客入京是日遣飭騎

七十五疋而迎唐客於海石榴市衢額田部連

難波津から 海石榴市の港

「三輪山麓（朝倉・
海石榴市・纏向）」
散策

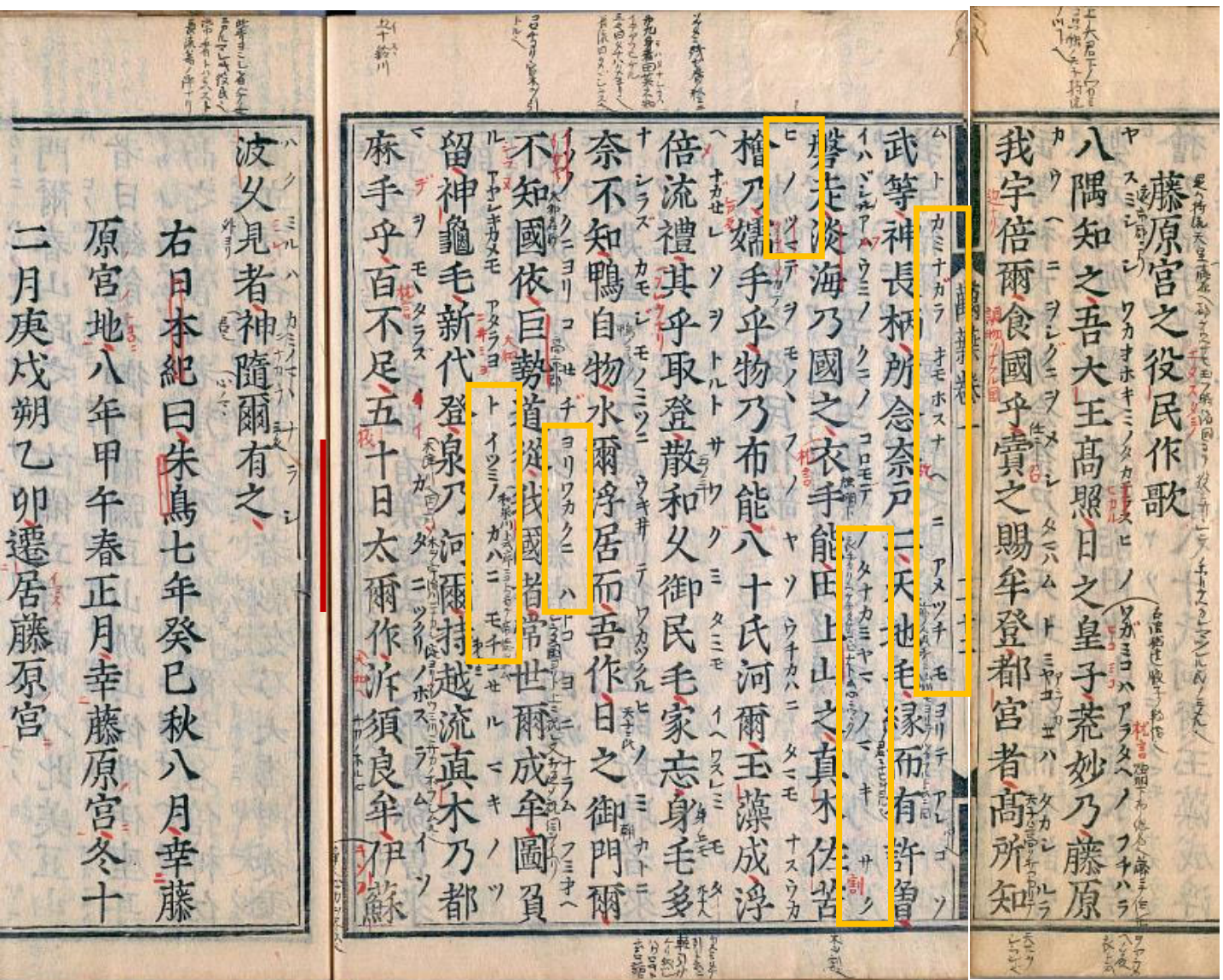
2019年7月11日



万葉集 卷第一

藤原宮役民の歌

7世紀末



*朱鳥七年=693年

万葉集 卷第一

藤原宮役民の歌

藤原宮之役民作歌

八隅知之吾大王高照日之皇子荒妙乃藤原
我宇倍爾食國乎賞之賜牟登都宮者高所知

武等神長柄所念奈戸二天上山而有許曾

磐走淡海乃國之衣手能田上山之真木佐苦

檜乃孀手乎物乃布能八十氏河爾玉藻成浮

倍流禮其乎取登散和父宇治川志身毛多

奈不知鴨自物水爾浮居而吾作日之御門爾

不知國依巨勢道泉河(木津川)成年圖負

留神龜毛新代登泉乃河爾持越流真木乃都

麻手乎百不足五十日太爾作所須良牟伊蘇

波父見者神隨爾有之

イカダニ作リ

右日本紀曰朱鳥七年癸巳秋八月幸藤
原宮地八年甲午春正月幸藤原宮冬十
二月庚戌朔乙卯遷居藤原宮

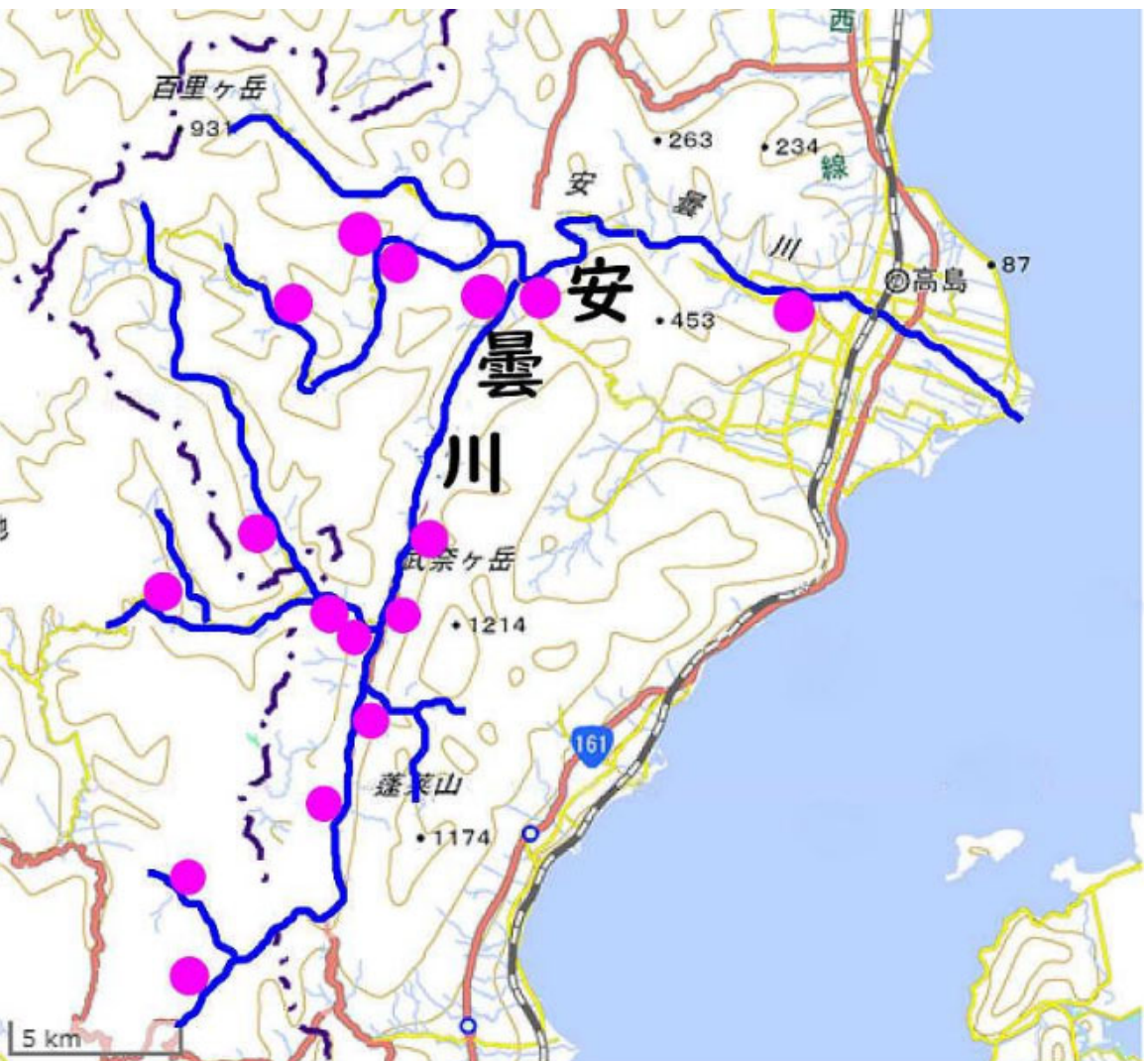
*朱鳥七年 693年



安曇川流域の シコブチ神社・神社跡

2019年8月22日

(安曇川上流)・百井、葛川、
久多、朽木の里探訪



日経新聞デジタル

2016年4月29日

6:00

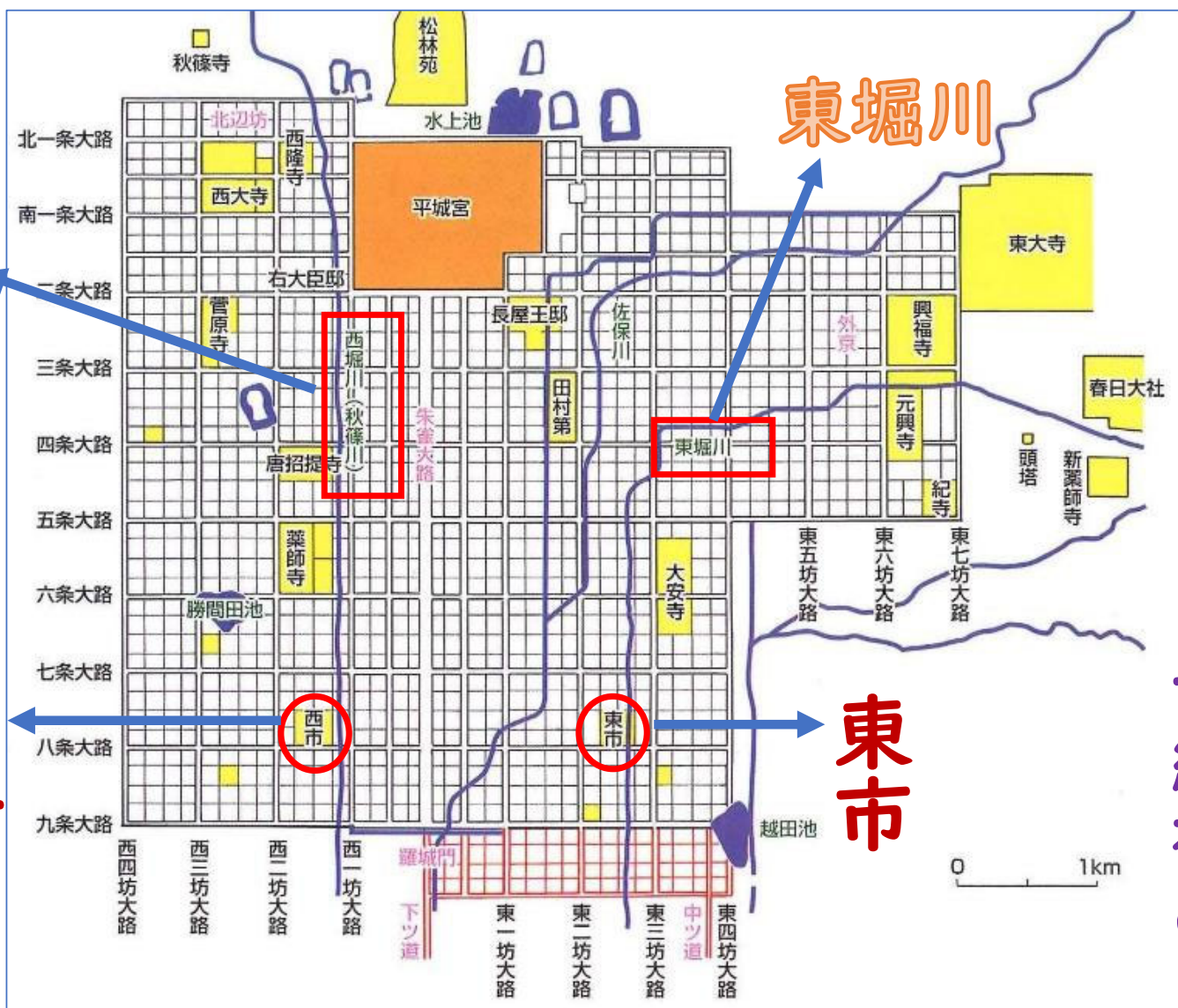
記事挿絵を描き直し

平城京

710年遷都

東西の市には、堀川（運河）が接していた。

8世紀初め



西堀川（秋篠川）

西市

東堀川

東市

東西市周辺の堀川

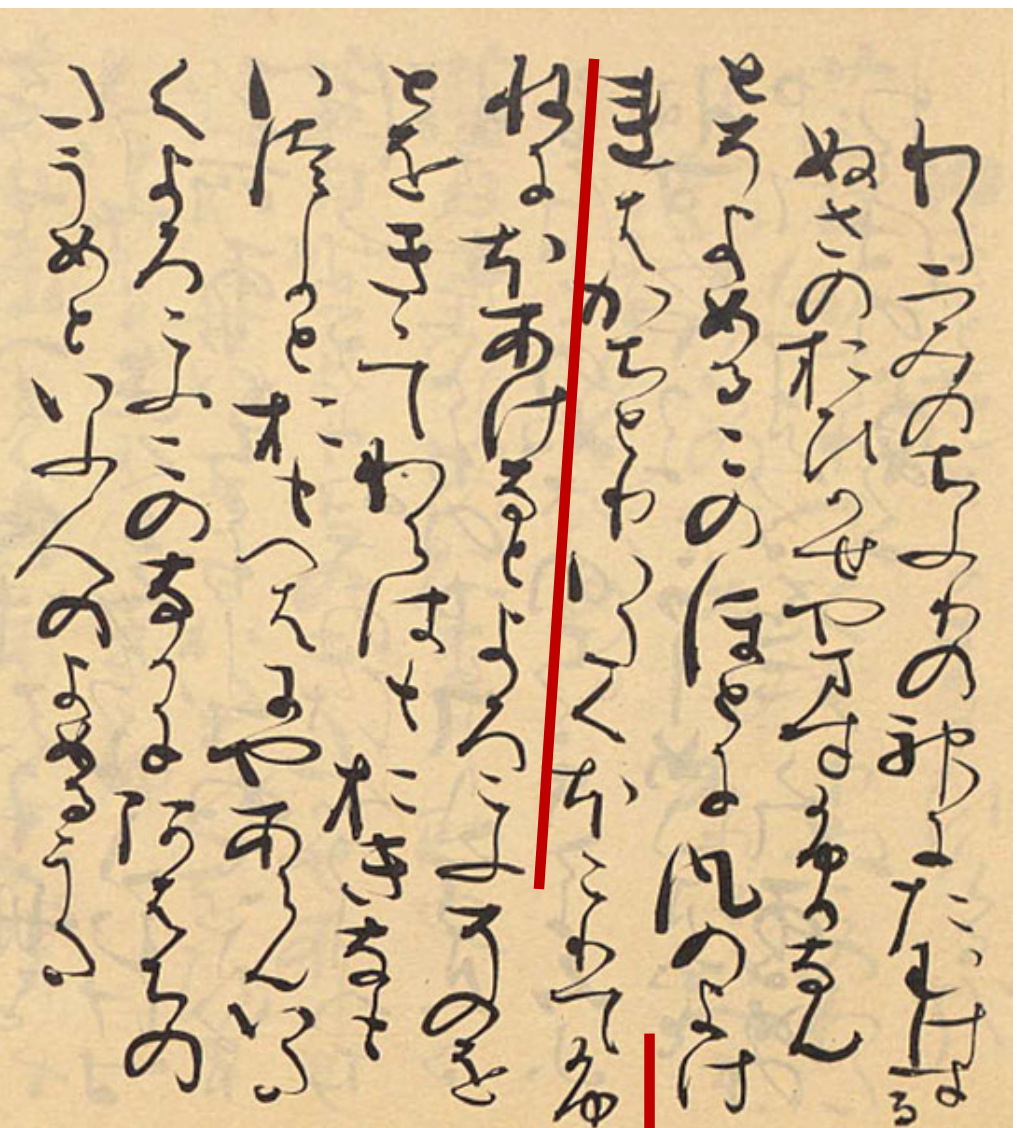
平城京には東西の市
周りにそれぞれ堀河が
南北に通され、京内の
物流の役割を果たして
いた。西堀河は現在
秋篠川とみられ、東堀
河は過去調査で京跡
の二条大路の間から
九条大路の間に数
カ所確認。いずれも
岸に2〜6メートル
空閑地があり、舟を
く通路だ。つたと考
れている。

奈良新聞デジタル

2019年3月18日

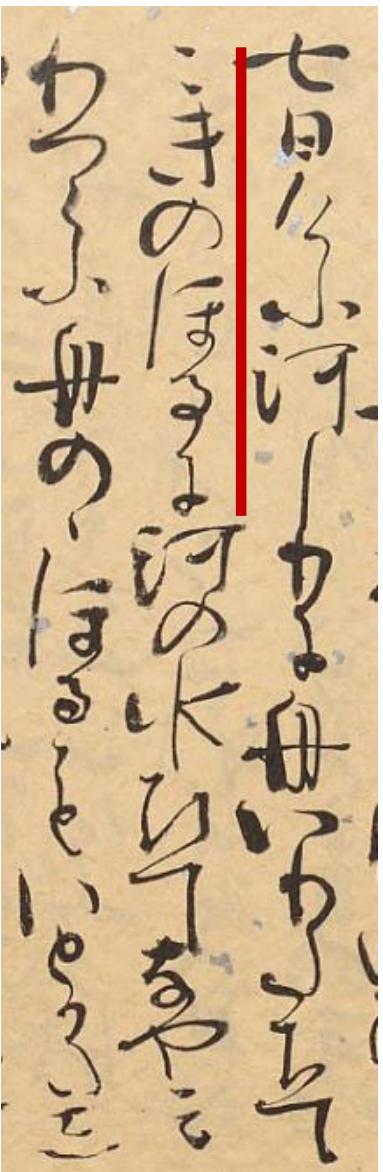
土佐日記 承平4年(934)
1月27日 徳島県阿南付近

藤原定家自筆本



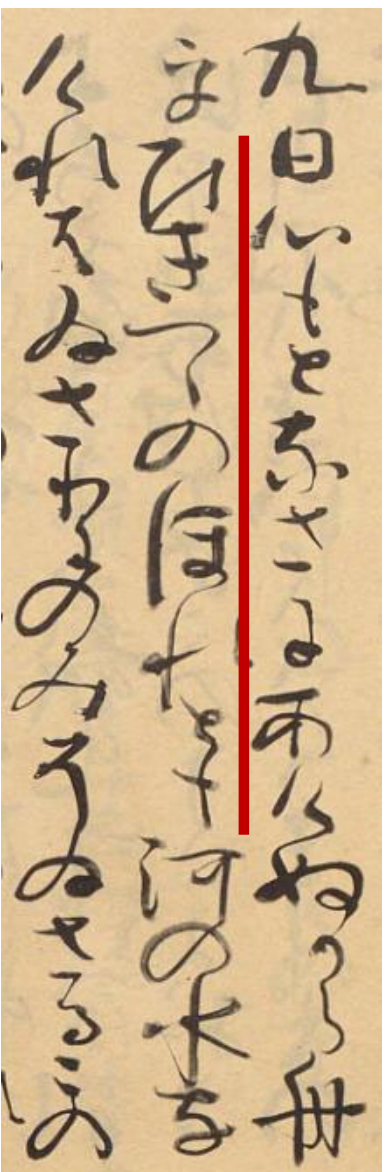
ば、かちとりのほかに風のよけれ
ねにほあけなどよろこぶ。その
をとをきゝてわらはもおきなも
いつしかとおもへばにやあらん
いたくよろこぶ。

2月難波津に至り淀川を遡る。



七日、けふ河じりに舟いりた
ちてこぎのぼるに、河の水ひ
て、なやみわづらふ。舟の
ぼることいかたし

七日、けふ河じりに舟いりた
ちてこぎのぼるに、河の水ひ
て、なやみわづらふ。舟の
ぼることいかたし



九日、心もとなさに、あけぬ
から、舟をひきつゝのぼれど
も、河の水なければ、みざり
にのみそるざる。

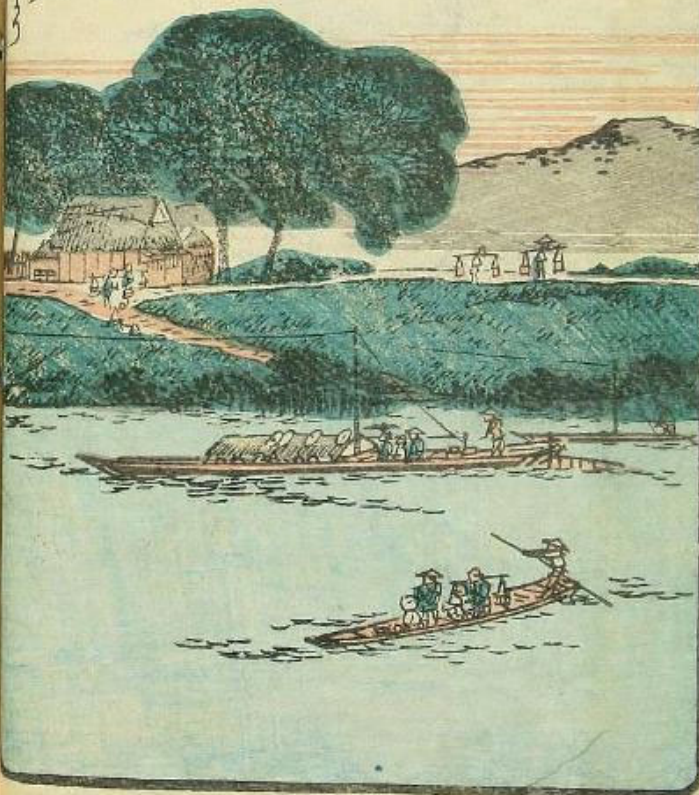
九日、心もとなさに、あけぬ
から、舟をひきつゝのぼれど
も、河の水なければ、みざり
にのみそるざる。

淀川の上り曳き舟

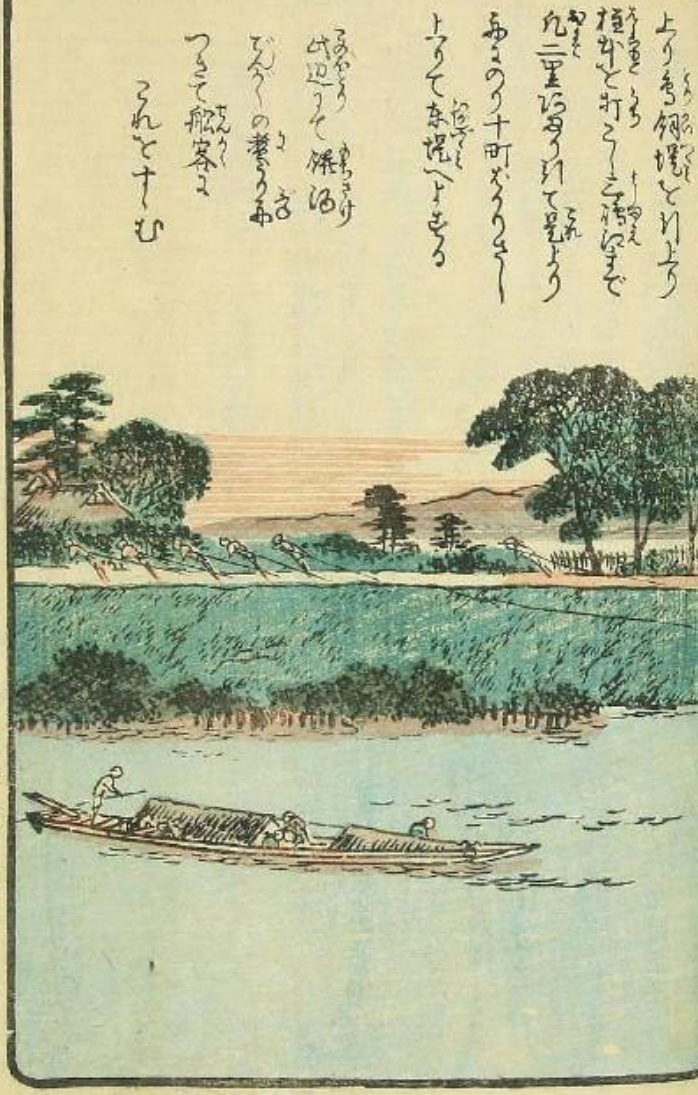
淀川兩岸一覽 上り船
文久元年（1861）刊

毛馬

第二度目（西より）
上船の水子（水子）
赤川（赤川）
西境（西境）
二番（二番）
三番（三番）
四番（四番）
五番（五番）
六番（六番）
七番（七番）
八番（八番）
九番（九番）
十番（十番）
十一番（十一番）
十二番（十二番）
十三番（十三番）
十四番（十四番）
十五番（十五番）
十六番（十六番）
十七番（十七番）
十八番（十八番）
十九番（十九番）
二十番（二十番）



より（より）
二（二）
三（三）
四（四）
五（五）
六（六）
七（七）
八（八）
九（九）
十（十）
十一（十一）
十二（十二）
十三（十三）
十四（十四）
十五（十五）
十六（十六）
十七（十七）
十八（十八）
十九（十九）
二十（二十）



（一）
（二）
（三）
（四）
（五）
（六）
（七）
（八）
（九）
（十）
（十一）
（十二）
（十三）
（十四）
（十五）
（十六）
（十七）
（十八）
（十九）
（二十）

淀川で帆を上げる船

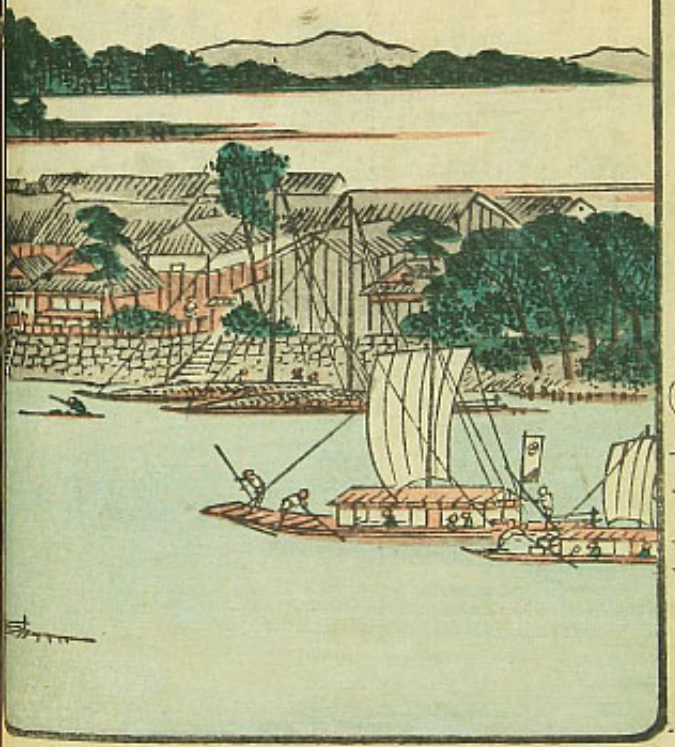
淀川兩岸一覽 上り船

文久元年（1861）刊

其二
牧方駅泥町

土人賣食
湯瓜皮朝
罵募錢何
所欺捕惡
不嫌如嚼
環恰供支
膝倦眠時

嶋探隠

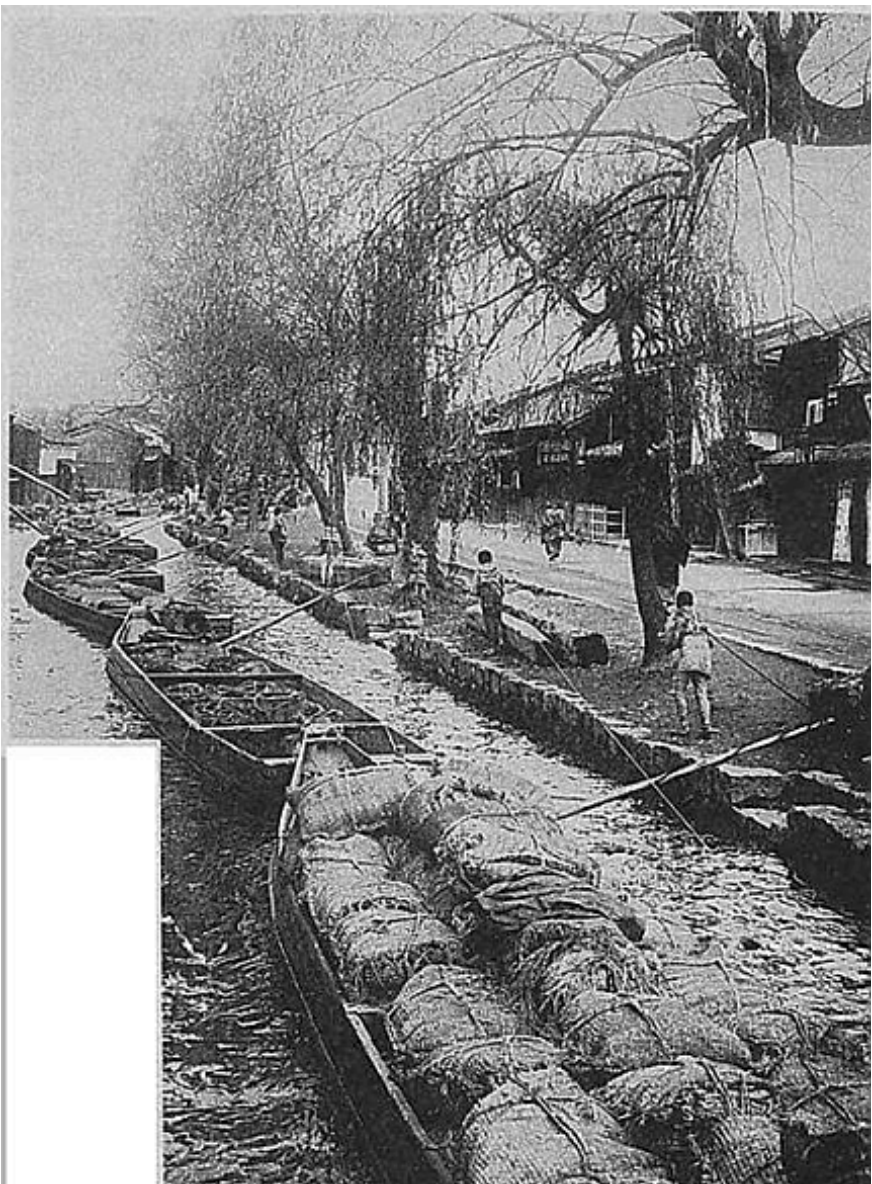


よるし知月
人の瓦る
口車ソつれ
酒あふ
のり合の舟

江戸
平鉄東作



高瀬川の曳船



中村弥左衛門編 『京都
の山水（京都写真帖 第
一巻）』

（便利堂 明治三六年
（一九〇三）年四月刊）

中川から清滝川源流へ
2019年8月8日



北山丸太を人力で運ぶ

大正後期

京都北山丸太協同組合提供



2022年12月23日
 琵琶湖疏水
 2022年10月21日
 造幣局と砲兵
 2022年3月3日
 工場



北垣国道日記「塵海」

明治15年4月16日

「且又京師ハ汽車ノ便アリト雖トモ、水運ノ便ヲ欠キ、僅ニ高瀬川ノ便アルモ、迂ニシテ其利甚少シ。由テ京師ノ運便ヲ開テ、商工ノ氣運ヲ一変シテ其隆盛ヲ求レハ、水運ヲ開クニ如クハ無シ」



北垣国道



上野敬輔と
ウォートレス

『大阪造幣局百年史』

1976年 大蔵省造幣局刊

さて一方、造幣局の建設地については慶応4年8月下旬に香港から大阪に造幣機械が到着し、既に難波、中之島が候補地となって検討されていたが、香港に派遣されていた上野敬輔の書翰が届き「造幣局の建設地は第一に水利を考
え、広大な面積を取るべし」とあったので難波や中之島は候補地から落ち川崎
村の旧幕府御破損奉行役所（今日の建設省にあたる）材木置場の跡地が造幣局の
建設地と決まった。

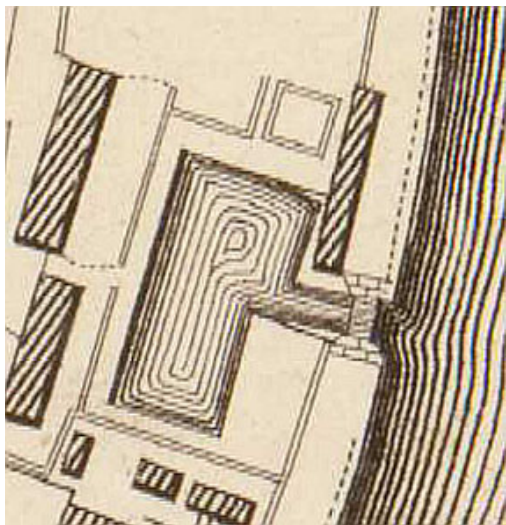
1868年 香港造幣局の造幣機械を6万両で購入。

1871年 大蔵省造幣寮として創業式。

大阪實測圖

明治19（1886）年

造幣局の舟入

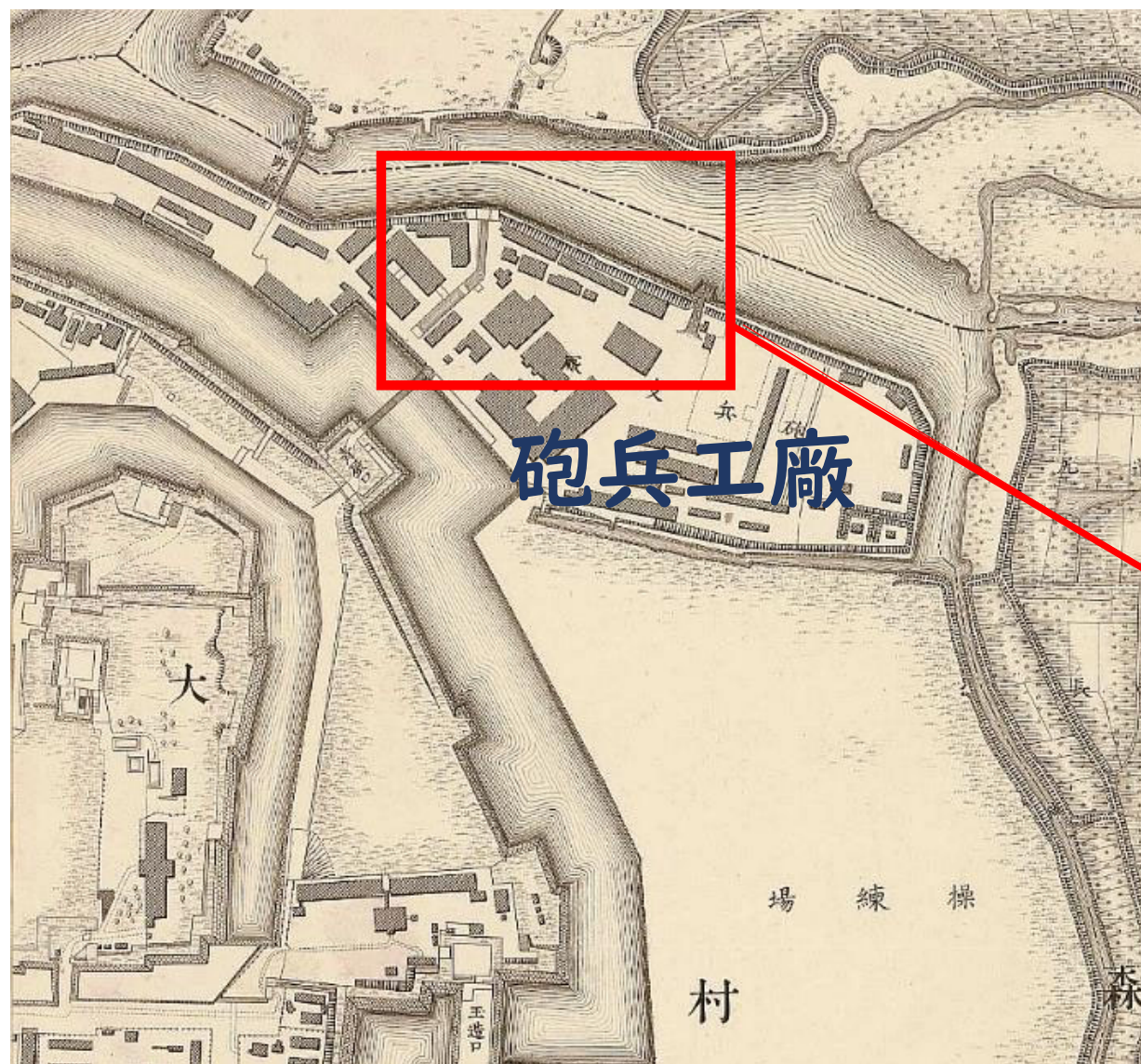
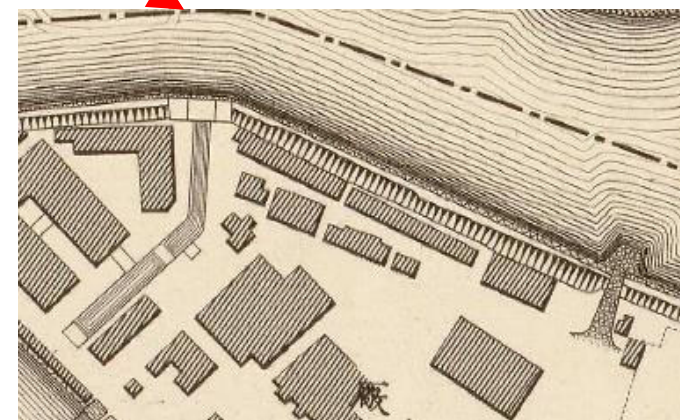


大阪實測圖
明治19年

砲兵工廠

船着き場

と舟入



大阪湾口の古墳と
幕末・明治の台場
そして二つの空港

